

平成 25 年度

金沢市埋蔵文化財調査年報

平成 26 年 3 月

(2014 年)

金 沢 市

(金沢市埋蔵文化財センター)

(4) 学術調査の成果

A. 小原越おはらこえ かえつこつきょうじょうかくぐん こどう (加越国境城郭群と古道)

(遺跡番号 県：なし 市：なし)

所在地：金沢市竹又町・堀切町地内ほか

北緯 36° 36' 16"

東経 136° 46' 05"

調査面積：41m²

種別：道跡

主な時代：中近世

担当：向井 裕知



■ 遺跡の概要

(1) 加越国境城郭群と古道の概要

加越国境とは旧加賀国と旧越中国の国境を示し、概ね現在の石川県金沢市と富山県小矢部市の県境付近を指している。この国境越えには、北陸道の他にも、複数の短距離で越中へ到達する脇街道と呼ばれる山越え道が利用されており、現在それらは、舗装道路や林道などに姿を変えながらも、多くが当時の道筋を踏襲している。これらの道は中世や近世にも使用されていたと考えられる。

本能寺の変から2年後の天正12年(1584)、羽柴秀吉と織田信雄・徳川家康連合軍が織田信長亡き後の天下統一をめぐり争った「小牧・長久手の戦い」が勃発するが、それに連動して、秀吉方の前田利家と家康方の佐々成政は、加賀と越中の国境付近に対峙することとなり、加越国境付近の街道沿いには多くの山城が築造された。

天正13年8月の羽柴秀吉による越中出陣により佐々成政は降伏したが、この後に越中の西半分が前田利家の長男利長に与えられたことで、加越国境付近の緊張状態は解消され、城郭群は不要になったと考えられる。

(2) 小原越の概要

近世に「小原越」・「小原谷道」・「小原道」、近代に「小原谷往来」と呼ばれており、江戸時代には北陸道を凌ぐ交通量があったという。

古代・中世の呼称は不明であるが、遺跡の分布や古文書の記載から中世には既に道があったものと推定され、本調査によって城郭によって遮断されていることがわかった。

北陸道を金沢市吉原町で分岐し、宮野町から松根城跡前の峠を越えて砺波郡北西部(現小矢部市)にいたる脇街道であり、延長約20kmである。

現存する道筋は現道や林道、作業道などとして現在も利用されているが、部分的には隣接して往時の道跡が残っており、本調査によってこれまでに知られていなかった尾根筋でも道跡が見つかった。

(3) 発掘調査概要

A 調査位置 (アルファベットは図と一致)

(ア) 松根城跡周辺

A：尾根下の平坦地 幅1.6m程の道跡を確認。

B：尾根筋 幅1.2m以上の道跡を確認。

- C：掘り割り地 幅 1.5 m前後の道跡を確認。
- D：堀切 岩盤削り出しの薬研堀を確認。

(イ) 小原越域

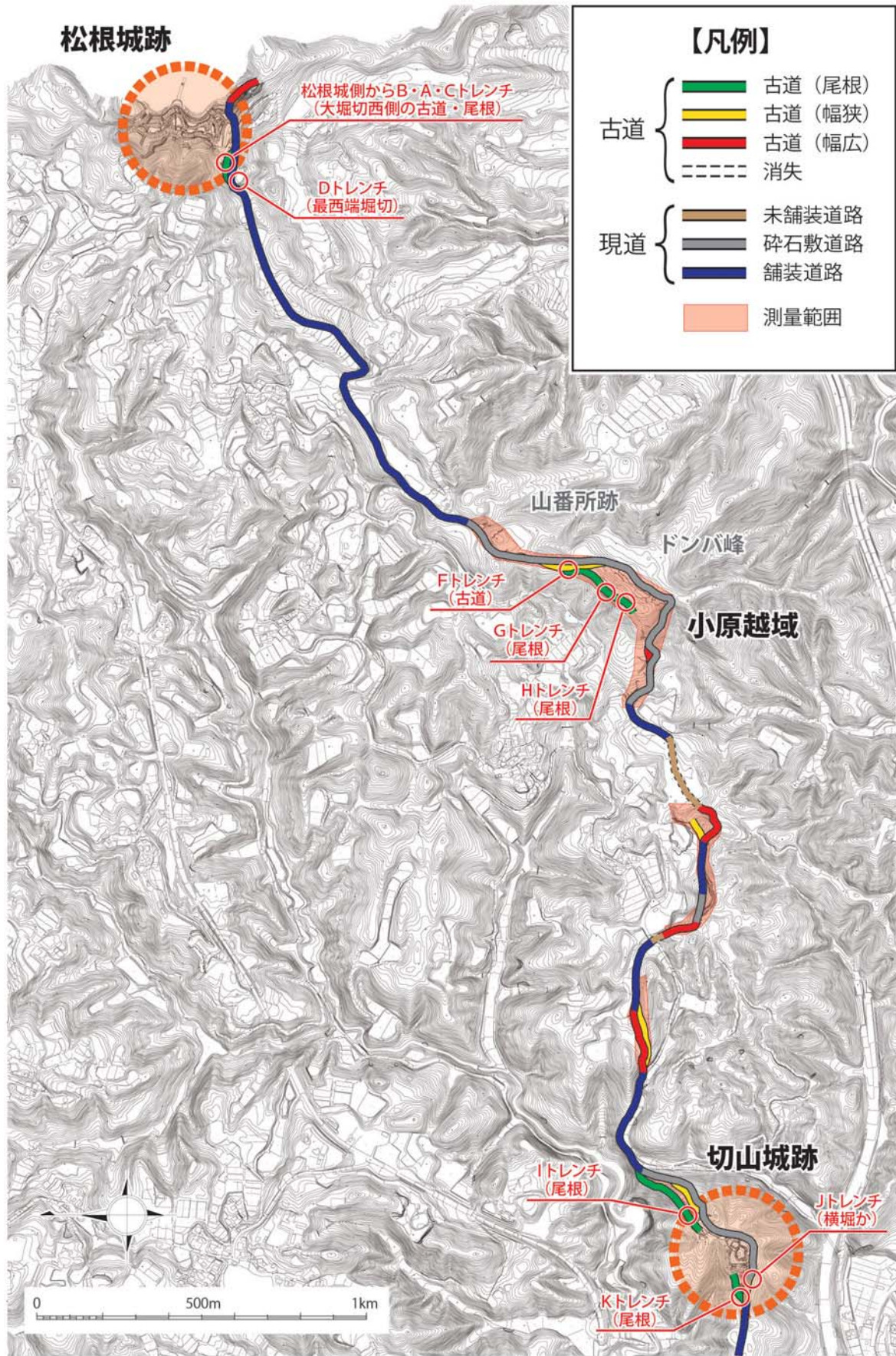
- F：掘り割り地 幅 1.5 m前後の道跡を確認。
- G：尾根筋 幅 1 m前後の道跡を確認。
- H：尾根筋 幅 1.5 m前後の道跡 2 条を確認。

(ウ) 切山城跡周辺

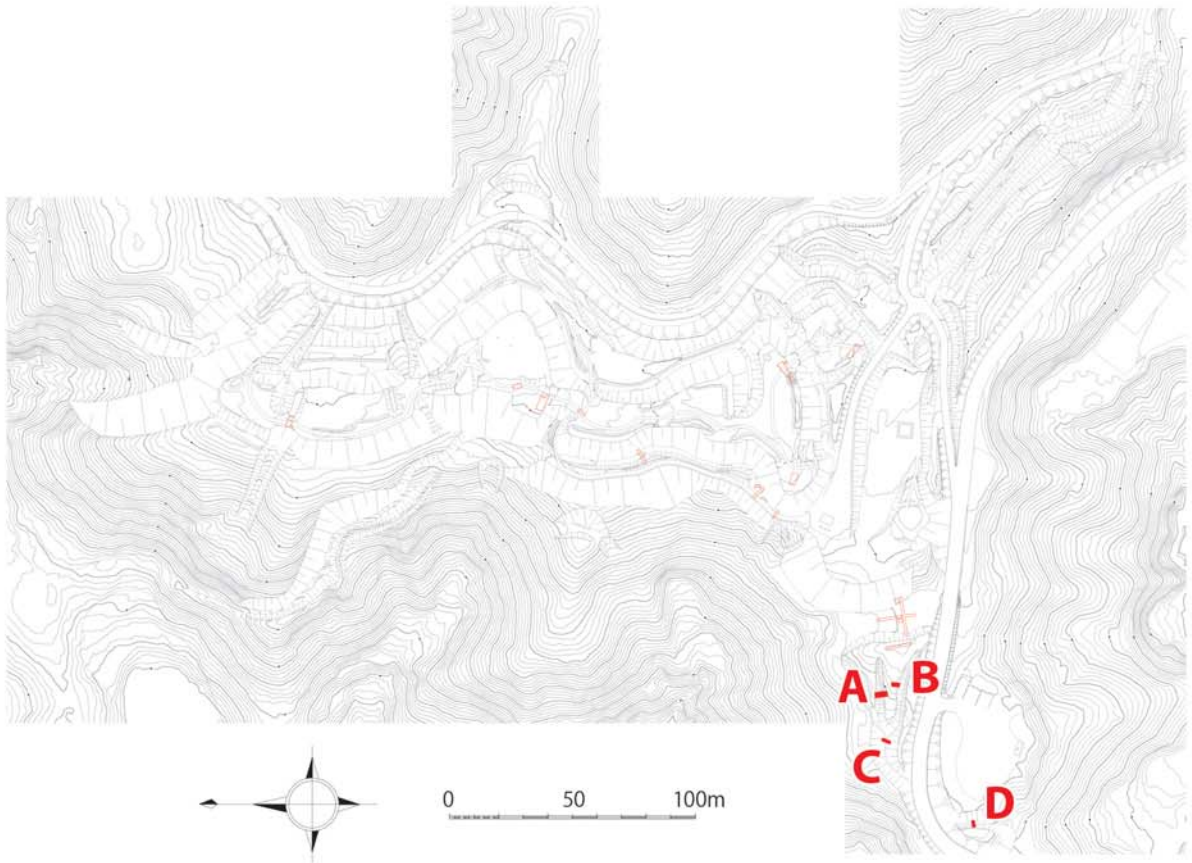
- I：尾根筋 幅 0.7 m程の道跡を確認。
- J：横堀 深さ約 1 m 以上の掘り込みを確認。
- K：尾根筋 道跡は未検出。

イ 調査成果

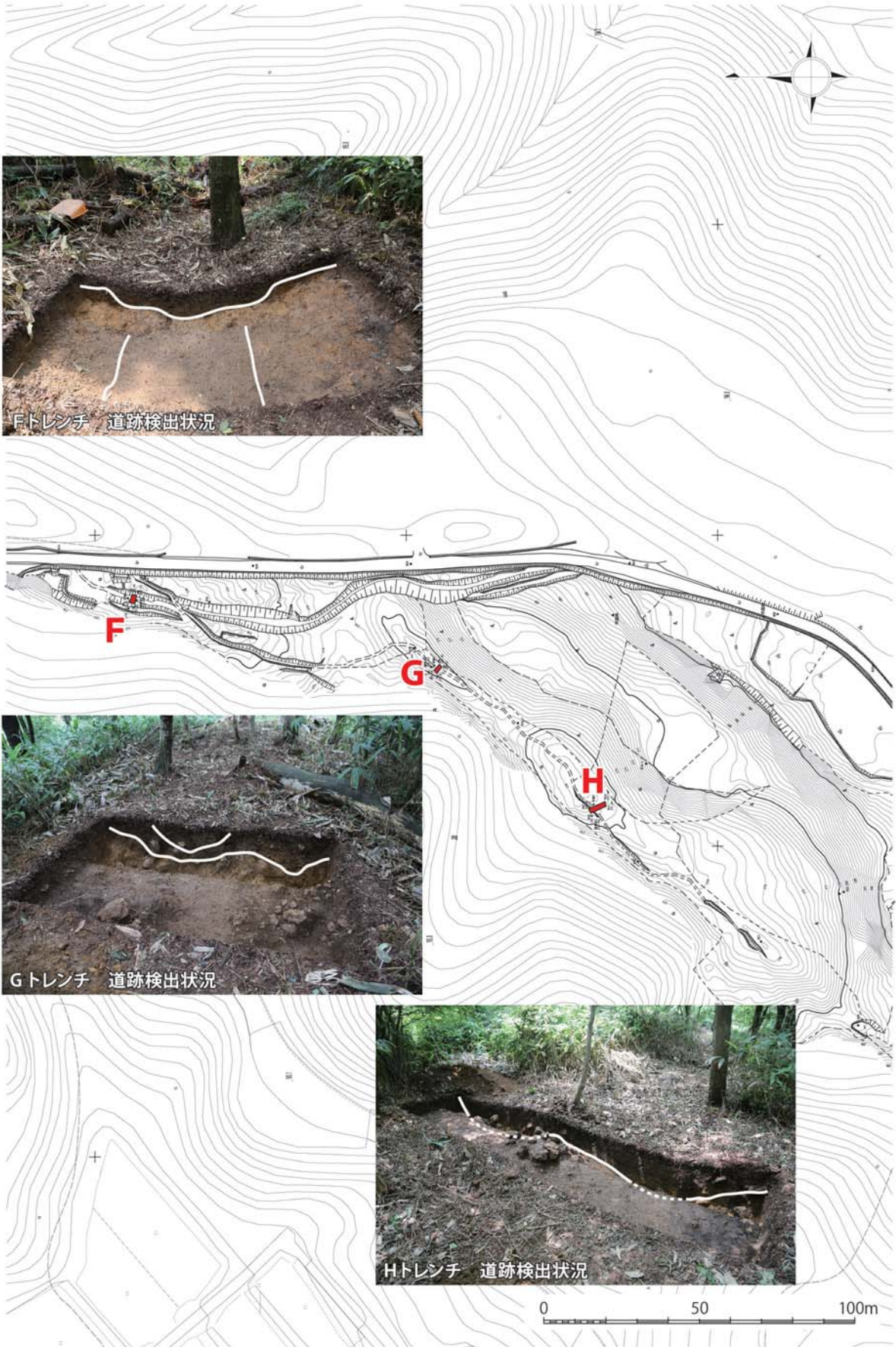
今回の測量及び発掘調査によって、尾根筋に道跡が存在することが明らかとなり、遺構としては幅 1 m前後の浅い凹みが確認できた。現在小原越と伝わる掘り割り道や現作業道が存在する場所に隣接する尾根で見ついていることから、古小原越である可能性が高い。また切山城や松根城の周辺でも尾根筋に道跡が確認されており、城郭の堀切などで遮断されていることがわかっている。つまり、中世に遡る古小原越は尾根道であることが推定可能となった。掘り割り道については幅狭と幅広のものがあ、幅広の道が荷車に対応することを考えると、当初は幅狭であったものから幅広掘り割り道への変遷が推定できる。よって、中世段階では尾根道、近世頃に尾根もしくは若干下がった位置での幅狭掘り割り道、荷車を用いた近代以降に幅広の掘り割り道を利用し、現在に至るようになったという変遷が想定できるようになった。



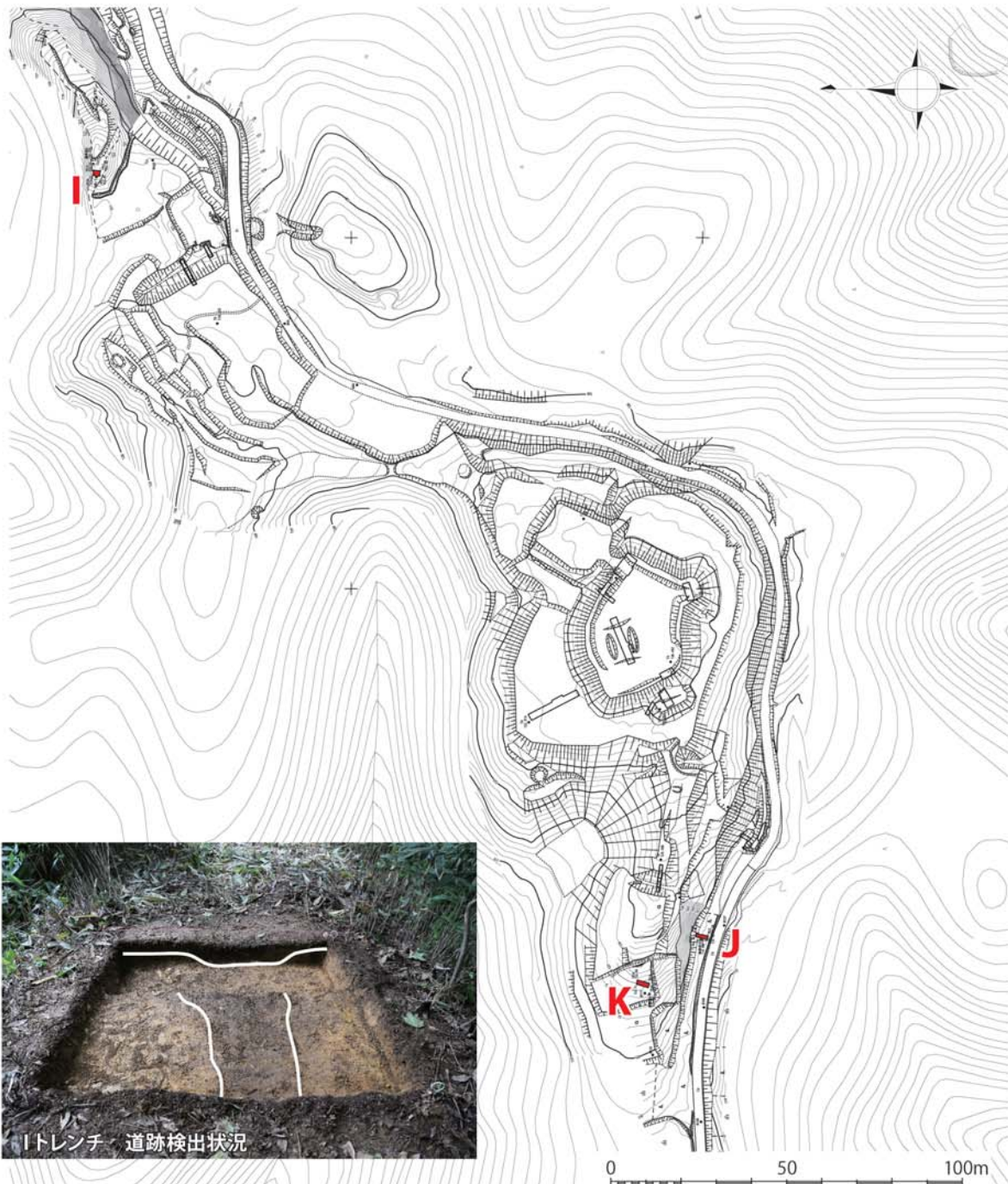
小原越発掘調査及び測量位置図



松根城跡周辺トレンチ



小原越域トレンチ



切山城跡周辺トレンチ